

「月寒水道」を語る

種村一三さん（月寒西在住）
たねむらからかすぞう

元豊平町役場職員の種村さんは、昭和三十二（一九五七）年、水道課長として月寒水道と深くかかわるようになりました。また、生まれも月寒という種村さんに、ご自身が見つめ続けた月寒水道を語っていただきました。



▲当時を懐かしそうに振り返る種村さん
大正14年生まれ 78歳
昭和22年 豊平町採用
同32年 水道課長
合併後も同41年まで札幌市水道局業務課で水道業務に携わる
同57年 退職

戦後、月寒地域に給水開始

豊平町役場が、軍の専用水道だった月寒水道を国から借り受けて、水道事業の経営を始めたのは昭和二十四（一九四九）年のことです。給水は月寒全地域が対象でした。

職人泣かせのヒューム管

しかし、その時にはすでに施設は老朽化していて、配水管敷設図面もありませんでした。それに戦時中に増設した配水管は、漏水しやすいコンクリート製のヒューム管だったんです。この維持管理が現場の職員にとって一番大変だったと思いますよ。補修工事は水を止めて行うので、短時間で直さなければならず、その作業は相当熟練した職人さんにしかなれないことですよ。今みたいに道具や材料が豊富な時代ではないですからね。

濁っていた水

戦後、引揚者が軍施設に収

容されるなど、月寒の人口が急増しました。そうすると給水個所が増えますよね。当時使っていた緩速ろ過池は、水をきれいにするために、ろ過速度を一定に保つ必要があります。浄水量にも限りがありました。

しかし、使う方が多くて浄水が追いつかず、水が不足してくると管の一部に空気が入り破裂してしまいます。それを防ぐため、ろ過速度を速めてでも給水に間に合うようにしなければなりません。するとろ過しきれず、水質が悪くなってくるわけです。塩素で殺菌するから大丈夫だといつてもやっぱり着色があるので分かります。そういう苦情がひんぱんに入るようになりました。特に札幌から移住してきた人々には評判が悪かったですよ。札幌の水はきれいだったのに、こっちに來たら風呂の水が、ひざ下が見えない

札幌の水との違い

札幌は豊平川扇状地だから、この井戸からもきれいな水が出たんですよ。それで逆に札幌は水道を引くのに苦労しましたよね。井戸水で間に合ってますから。札幌に水道ができたのは、昭和十二（一九三七年）のことだから他都市と比べても遅いでしょう。

月寒水道は、初めから西岡に貯水池を造って水源を確保していたわけですから、歴史的な流れは全く違うんですよ。

水源を守るための雨ごい

戦後の西岡水源池の水利権（河川の水を使用する権利）は、周辺農家の人たちが組織する組合にあったので、水源確保にひと苦労しました。夏の渇水期は、水源が枯れたら一大事ということで、町議会議員や組合の人たちと月寒川の源といわれる空沼岳に登ってみ

んなで雨ごいをしました。その時雨は降ってね。ご利益あったって喜んだものです。田んぼも水が欲しいし、こっちも住民の命が懸かっていますよ。水源を守るため必死でした。後で深井戸を掘ることになって助けられた思いがしましたね。



▲昭和33年の夏、空沼岳への雨ごいの記念写真（前列左から3人目が種村さん）

月寒水道拡張計画

その後の深井戸を掘って水源に加える計画は、結局、計画した通りには水が出ませんでした。その途中で札幌市と

合併したので、私たちにとっては神様仏様でしたよ。札幌の水も使えるようになりましたからね。

水道の使命は「清浄豊富低廉」

月寒水道は歴史は長いけれど、施設の老朽化による漏水などが続出し、新たな水源も確保できず、利用者が増加するの、逆に経営は難しくなっていました。「清浄豊富低廉」が水道の使命であるはずが、浄水された水は不足していくばかりで、水道料金を徴収に行くとき苦情が出るのは当たり前です。きれいな水を十分に出したいのはやまです。それができず、つらい思いをしました。自分の責任や使命を果たせない悔しさです。

合併になって、そんな底の月寒水道を守ることから解き放たれて、本当に安心しましたよ。「合併によって救われた」それが私の実感ですね。

◆ ◆ ◆
明治からの歴史を持つ「月寒水道」。その歴史は、長い困難の連続でした。半世紀以上の努力の上に成り立っていたことを、この豊平の地で生きる私たちは、いつまでも忘れずにいたいものです。

※緩速ろ過…薬品を使わず、原水を砂層に通しゆっくりとした速度で浄水する方法で、砂層の表面や内部に繁殖した藻類や細菌などの生物膜の作用によって浄化される。

